

# 《一切衆生喜見菩薩説話》の平行研究

— Dvāviṃśatyavadānakathā 18 章 燈明供養話と『法華經』薬王品 —

岡田真美子 (真水)

## はじめに——研究の背景と目的——

Dvāviṃśatyavadānakathā (以下 Dvāv) 「22 アヴァダーナ物語」は仏教混淆サンスクリットで書かれた後期アヴァダーナ文献の一つである。1882 年に発表された Rājendralāla Mitra による簡略な内容紹介 (Mitra 1882, 83-87) によって世に知られるところとなったが、その後も本文献に関する研究は極めて少なく、Léon Feer による Avadānaśataka (以下 Avś) からの引用の指摘 (Feer 1891, xix-xx, xxvii) や Moriz Winternitz の短い言及 (1919, 280), 若干の言語学的研究, Subhāṣitaratnakaraṇḍakakathā とのテーマの共通性に関する指摘などがあるくらいであった。それらはすべて、Dvāv のいずれかの写本を元になされた研究である。筆者は Michael Hahn 博士の収集した 22 の写本を校合し、1993 年、はじめて批判校訂したテキストを出版した。

この 24 章よりなる布施物語 Dvāv 中の説話の平行研究については、上記 Feer 以外には筆者によるものしかない (1985 年に提出した博士学位論文の未公開注釈部分に含まれる)。本論文はこの Dvāv の第 18 章に挿入された引用譚「一切衆生喜見菩薩説話」の初めての平行研究である。

## 1. Dvāv 第 18 章燈明供養の内容

第 18 章の構成は次の通りである。

時代は、過去 91 劫 Vipaśvin 仏出世時、場所は Bandhumatī, 登場人物は、Vipaśvin 仏, Bandhumat 王, バラモンの家長たち (ここまでは Avś 第 69 話の引用あり) と Bandhumatī とは別の都に住む主人公である。

[1] 【仏塔右繞供養】主人公は手足がなく、またハンセン病に冒されていた。彼は、Bandhumatī の都で、バラモンたちが Vipaśvin 仏の仏塔を供養していることを聞き、自分も身体のかぎりには仏塔を供養したいと思いついた。夜、苦勞の末に仏塔にたどり着き、地に倒れたまま身体を転がして、仏塔を右繞する。

## (206) 《一切衆生喜見菩薩説話》の平行研究 (岡 田)

- 108 回右繞した時、手足が備わり、ハンセン病が消えた。彼は五体倒地して礼拝したあと帰宅して、いぶかる家人に仏塔供養をして起こったことを告げる。
- [2] 【報恩の燃身供養の企てと制止】 お礼参りのため彼は捨身供養を誓い、八日、十四日、十五日に齋戒を守って、1年後、Kārttika 月から Āsvin 月の満月まで断食を行い、燃身しようとする。その時、天からそれを止める声が響く。
- [3] 【挿入話：一切衆生喜見菩薩の燃身供養】 天の声はかつての一切衆生喜見菩薩の仏塔燃身供養を語る。
- [4] 【燈明供養】 天の声は世尊であった。燃身供養は為し難いので、燈明の輪を作って捧げるように、と世尊に言われ、主人公は1ヶ月の間、仏塔に燈明の輪を燃やし続けて供養した。
- [5] 【命終転生】 誓願の力によって Dīpārçīṣa 世界に Dīparāja という名の辟支仏として生じ、五神通を得、輪廻を脱却すべく、七多羅樹の高さの虚空に飛び上がり、Tejas 世界に達して、流星のように般涅槃に至った。
- [6] 【燈明供養の讚歎詩】 世尊の広説。Subhāṣitaratnakaraṇḍakathā 第 95, 96, 98, 99 の引用を含む 8 つの偈で燈明供養を讚歎する。

これらの中で特に注目すべきは、[3] 挿入話である。すなわち、一切衆生喜見菩薩の燃身供養の物語が天からの声（実は世尊）によって語られるくだりである。これが重要なのは、『法華経』薬王品からの引用だからである。

## 2. Dvāv 挿入話と『法華経』薬王品の一切衆生喜見菩薩説話の平行比較

つぎに、XXII. bhaiṣajyarājapūrvayogaparivarto nāma dvāviṃśatitamaḥ 22 薬王菩薩本事品第二十三の本文に、Dvāviṃśatyavadānakathā XVIII. Dīpadānakathā (平行箇所はボールド部分)、さらにいまひとつ見つかった平行 Divyāvadāna (以下 Divy) の未公開写本 Tokyo Univ. No. 170 中の XII. Dīpadānakathā (平行箇所は\_\_部分)<sup>1)</sup> の一致するところを示す。

[KN. p. 404, l. 9] atha khalu bhagavān . . . vīditvā tasyāṃ velāyāṃ nakṣatrarājasamkusu-mitābhijñāṃ bodhisattvaṃ mahāsattvam etad avocat / **bhūtapūrvam** kulaputrātīte'dhvani gaṅgānadīvālikāsamaīḥ kalpair yad āsīt tena kālena tena samayena **candrasūryavimalaprabhāsaśrīr nāma tathāgato 'rhan** samyaksambuddho loka udapādi vidyācaraṇasaṃpannaḥ sugato lokavid anuttaraḥ puruṣadamyasārathīḥ śāstā devānāṃ ca manuṣyānāṃ ca buddho bhagavān / [l. 14] . . .

[KN. p. 405, l. 6] **tasya** bhagavataś candrasūryavimalaprabhāsaśrīyas tathāgatasyārha[l. 7]taḥ samyaksambuddhasya **pūjākarmaṇe** / sa ca bhagavān imaṃ saddharmapuṇḍarīkaṃ . . .

[p. 405, l. 9] . . . tasya khalu punar nakṣatrarājasamkusumitābhijña bhagavataś candrasūrya-  
vimalaprabhāsaśriyas tathāgatasyārhatāḥ samyaksambuddhasya dvācatvāriṃśatkalpa[l. 11]saha-  
srāṇy āyuspramāṇam abhūt teṣāṃ ca bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ teṣāṃ ca  
mahāśrāvakāṇāṃ tāvad evāyuspramāṇam abhūt /

sa ca . . . sa dvādaśānāṃ varṣasahasrāṇāṃ atyayena sarvarūpasmdarśanam nāma samādhiṃ [p.  
406] pratilabhate sma / . . . sa tasyāṃ velāyāṃ tathārūpaṃ samādhiṃ samāpanno yasya samā-  
dheḥ samanantarasaṃpannasya sarvasattvapriyadarśanasya bodhisattvasya mahāsattvasyātha  
tāvad evopapary antarīkṣān mādāravamahāmādāravāṇāṃ puṣpāṇāṃ mahantaṃ  
puṣpavarṣam abhipravṛṣṭam / kālānusāricandanameghaḥ kṛta uragasāracandravarṣam  
abhipravṛṣṭam / tādrīśī ca nakṣatrarājasamkusumitābhijña sā gandhajātir yasyā ekaḥ karṣa imāṃ  
sahālokadhātum mūlyena kṣamati //

atha khalu punar nakṣatrarājasamkusumitābhijña sa sarvasattvapriyadarśano bodhisattvo  
mahāsattvaḥ smṛtimān samprajānaṃs tasmāt samādher vyudatiṣṭhad vyutthāya caivaṃ  
cintayām āsa / na tatha rddhiprātihāryasaṃdarśanena bhagavataḥ pūjā kṛtā bhavati  
yathātmabhāvaparityāgeneti / atha khalu punar nakṣatrarā[p. 407]samkusumitābhijña sa  
sarvasattvapriyadarśano bodhisattvo mahāsattvas tasyāṃ velāyāṃ agaruturuṣkaku-  
ndurukarasam bhakṣayati sma campakatailaṃ ca pibati sma /

tena khalu punar nakṣatrarājasamkusumitābhijña paryāyeṇa tasya sarvasattvapriyadarśanasya  
bodhisattvasya mahāsattvasya satatasamitaṃ gandham bhakṣayataś campakatailaṃ ca pibato  
dvādaśavarṣāṇy atikrāntāny abhūvan /

atha khalu nakṣatrarājasamkusumitābhijña sa sarvasattvapriyadarśano bodhisattvo mahāsattvas  
teṣāṃ dvādaśānāṃ varṣāṇāṃ atyayena taṃ svam ātmabhāvaṃ divyair vastraiḥ pariveṣṭya  
gandhatailaplutaṃ kṛtvā svakam adhiṣṭhānam akarot svakam adhiṣṭhānam kṛtvā svaṃ kāyaṃ  
prajvālayām āsa tathāgatasya pūjākarmaṇe 'sya ca saddharmapuṇḍarīkasya dharmapa-  
ryāyasya pūjārtham /

atha khalu nakṣatrarājasamkusumitābhijña tasya sarvasattvapriyadarśanasya bodhisattvasya  
mahāsattvasya tābhiḥ kāyapradīpaprabhājavālābhir aśītigaṅgānadīvalīkāsamā lokadhātavaḥ  
sphuṭā abhūvan / tāsu ca lokadhātuṣv aśītigaṅgānadīvalīkāsamā eva buddhā bhagavantas te  
sarve sādhukāraṃ dadanti sma / sādhu sādhu kulaputra sādhu khalu punas tvam  
kulaputrāyaṃ [p. 408] sa bhūto bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ vīryāmbha iyaṃ sā bhūtā  
tathāgatapūjā dharmapūjā / na tathā puṣpadhūpagandhamālyavilepanacūrṇacīvaraccha-  
tradhvajapatākāpūjā nāpy āmiṣapūjā nāpy uragasāracandanapūjā / idaṃ tat kulaputrā-  
grapradānam na tathā rājyaparityāgadānam na priyaputrabhāryāparityāgadānam / iyaṃ  
punaḥ kulaputra viśiṣṭāgrā varā pravarā praṇītā dharmapūjā yo 'yam ātmabhāvaparityāgaḥ /  
atha khalu punar nakṣatrarājasamkusumitābhijña te buddhā bhagavanta imāṃ vācaṃ bhāṣitvā  
tūṣṇīm abhūvan //

tasya khalu punar nakṣatrarājasamkusumitābhijña sarvasattvapriyadarśanātmabhāvasya  
dīpyato dvādaśa varṣasātāny atikrāntāny abhūvan na ca praśamaṃ gacchati sma / sa paścād

(208) 《一切衆生喜見菩薩説話》の平行研究 (岡 田)

dvādaśānām varṣaśātānām atyayāt praśānto 'bhūt /

sa khalu punar nakṣatrarājasamkusumitābhijñā sarvasattvapriyadarśano bodhisattvo mahāsattva evamrūpām tathāgatapūjām ca dharmapūjām ca kṛtvā tataś cayutas tasyaiva bhagavataś candrasūryavimalaprabhāsaśriyas tathāgatasyārhatāḥsamyaksambuddhasya pravacane rājño vimaladattasya grha upapanna aupapādika utsaṅge paryaṅkeṇa prādurbhūto 'bhūt /... [p. 409] saptatālamātram vaihāyasam abhyudgamyā ...

上記の比較により、元となったテキストは、もっとも内容が豊富である法華經 Saddharmapuṇḍarīkasūtra であり、次が Dvāv, それを更に引用したと考えられるのが Divy T170 写本であることがわかる。

### 3. 一切衆生喜見菩薩説話 Sarvasattvapriyadarśana (薬王菩薩本事話)

『法華經』の薬王菩薩前生譚である一切衆生喜見菩薩の物語の梗概は、次の通りである：一切衆生喜見菩薩は、『法華經』及び、その教えを説き明かしてくれた日月浄明徳仏 Candrasūryavimalaprabhāsaśrī を供養するため、香木香油を飲み続け、ついに自らの身体に火を燈した。命終して、次生では王家に化生したあと、今度はこの仏の舍利を納めた仏塔の前で、臂に火を燈して供養した。

菩提心を起こしたものは、この菩薩のように手足の一指でも燃して仏塔を供養せよ（「若有発心欲得阿耨多羅三藐三菩提者。能燃手指乃至足一指供養仏塔」大正蔵 9. 54a12-14）と薬王品にあるために、中国・ベトナム・韓国などで、実際に燃身・燃指供養が行われた（ている）という記録が存在する。これらに関しては、船山徹や望月海慧、三友量順などの詳細な研究がある<sup>2)</sup>。

また、日本でも、「行基ならびに弟子等 … 指臂を焼き剥ぎ門を経て仮説して」（『続日本紀 二』新日本古典文学大系 13, 岩波書店, 26-27, 養老元年（717）四月壬辰条）という表現が見られ、『大日本国法華経験記』（鎮源作, 11世紀）は「日本国最初の焼身」として、薬王菩薩に倣って燃身供養した沙門応照の逸話を挙げている（巻上第九「奈智山の応照法師」）<sup>3)</sup>。

ところが、この薬王菩薩前生譚である一切衆生喜見菩薩説話は、このように社会に実際的影響を与えた物語であるにもかかわらず、かつて干潟龍祥、杉本卓洲によって思想史的意義が論じられたことはあっても<sup>4)</sup>、これまで文献学的な平行説話研究はされて来なかった。その理由は、平行説話の展開が少ないからである。この説話ばかりでなく、『法華經』中の説話は、いずれも平行が極めて少ない。それ以前の他の本生経類からの引用・借用がないばかりでなく、他の経典に引用されることもほとんどなく、特異説話群ともいふべき存在である。

注意すべきは、これまで一切衆生喜見菩薩のモチーフ比定が行われていない為に、これと他の説話との混同が見られることである。たとえば、干潟が、一切衆生喜見菩薩説話と同話とした Kāñicasāra 説話（干潟 1970, 619）は、別話であるとみるべきである。ここで、一切衆生喜見菩薩の物語の説話モチーフを挙げて、このことを説明しておこう。

一切衆生喜見菩薩説話の必須モチーフはつぎの2つである。

- 1) 燃指・燃臂・燃身によって燈明となす
- 2) 仏（塔）に対する燈明供養であること

『賢愚経』や今昔物語で知られる Kāñicasāra（虔闍娑梨）説話の主人公は、妙法を求めて、身体を剷<sup>えぐ</sup>ってそこに脂炷を入れて燃やし、千の燈明をともした（大正蔵 4. 349c11, 15）。しかし点灯の目的は、求法のためとされているから、モチーフ 2) とは相違する。したがって一切衆生喜見菩薩説話とは別話であると考えられるべきである。

また同じ『賢愚経』二十八品に、商主が白い布を身に纏い、これに酥油を注ぎ自らの身を炬火として七日間燃やして隊商を導いた（「是時薩簿。即以白氈。自纏兩臂。酥油灌之。然用当炬酥油。将諸商人。経於七日」大正蔵 4. 393b18-19）という燃身物語がある。これは『悲華経』巻九の平行がよく知られている（大正蔵 3. 227a5ff.）。しかし、これも燃身の目的が、隊商たちの行く手を照らし導くことであるので、やはりモチーフ 2) とは相違していて別話である。

また抗議のために行われる焼身自殺も、薬王菩薩本事話とは別の文脈であることに注意する必要がある。

#### 4. 一切衆生喜見菩薩説話の平行

以下に挿入話「一切衆生喜見菩薩説話」の平行一覧を挙げる。漢訳者のうち、竺法護、鳩摩羅什、闍那崛多は『法華経』の訳者たちであり、世親は『法華経憂波提舍』の作者である。『大宝積経』は『法華経』と同じく前世物語に pūrvayoga という用語を使うという共通性がある。このような狭い範囲での平行分布であるが故に、後期アヴァデーナである Dvāv に引用されたことは驚きである。

- ① Saddharmapuṇḍarīkasūtra XXII. bhaiṣajyarājapūrvayogaparivarto nāma dvāviṃśati-tamaḥ 22

## (210) 《一切衆生喜見菩薩説話》の平行研究 (岡 田)

『正法華經』薬王菩薩品第二十一 (竺法護訳, 286年) 大正蔵 9. 125a-127a

『妙法蓮華經』薬王菩薩本事品第二十三 (鳩摩羅什訳, 406年) 大正蔵 9. 53a-55a

『添品妙法蓮華經』薬王菩薩本事品第二十二 (闍那崛多他訳, 601年) 大正蔵 9. 187c-189c

② Dvāviṃśatyavadānakathā (Okada 1993, 187, l. 7-189, l. 7)

③ Divyāvadāna 東京大学 No. 170 写本 XII. Dīpadānakathā

④ 『大智度論』卷第十 (龍樹作, 鳩摩羅什訳, 402-405年) 大正蔵 25. 130c6-19<sup>5)</sup>

⑤ 同 卷第十二 (同上) 大正蔵 25. 150b16-17<sup>6)</sup>

⑥ 『転法輪經憂波提舍』 (世親作, 毘目智仙訳, 541年) 大正蔵 26. 357a13-14<sup>7)</sup>

上記以外に、主人公の名前がなかったり、別であったりするが、モチーフが2つとも一致し、平行であると考えられるものに、次の『大宝積経』中の二会に記されるものがある。

⑦ 『大宝積経 密迹金剛力士会』第三之一 (竺法護訳, 280年) 大正蔵 11. 44b1-14<sup>8)</sup>

⑧ Rāṣṭrapālapariṣcchā 第12話<sup>9)</sup>

同 Tib. p. 82.13-16<sup>10)</sup>

同 漢訳① 『大宝積経 護国菩薩会』 (闍那崛多訳, 585-600年) 大正蔵 11. 461c29-462a1<sup>11)</sup>

同 漢訳② 『護国尊者所問大乘経』 (施護訳, 980-?年) 大正蔵 12. 5b26-27<sup>12)</sup>

[なお『合部金光明経』の「栗車毘国王童子。名曰一切衆生喜見」(大正蔵 16. 361c6-7) は、主人公の名前が「菩薩」を除いて同じではあるが、別話である。]

### おわりに——本研究の成果——

本研究は、初めて、Dvāviṃśatyavadānakathā 第18章燈明供養中に法華経薬王菩薩本事品の「一切衆生喜見菩薩説話」からの抜萃引用があることを明らかにし、この説話の詳細な平行一覧を提示した。これまで後期アヴァダーナ文献は、根本説一切有部律 (MSV) や Avadānaśataka などの先行アヴァダーナ類などに平行を持つことは知られていたが、『法華経』、『大宝積経』に平行があることは注目すべきである。

法華経中の説話は、いずれも平行が極めて少ない。それ以前の他の本生経類からの引用・借用がないばかりでなく、他の経典に引用されることもほとんどなく、特異説話群ともいふべき存在である。そのような中であって、本論は、法華経の説話がそれ以後のインド仏教説話文学に影響を与えた希少な例を示すこと

ができた。

- 1) 第 12 章 Dīpadānakathā は東大写本にのみあり、他の Divy 写本には存在しない。
- 2) 中国に関しては船山の勝れた研究がある。ベトナムに関しては望月の研究があり、そこには周辺国の通事的考察も含まれている。現代韓国における燃指法供養の例としては、三友 1996, 406 注 (15) があり、燃身供養が過去のものでないことがうかがえる。[なお、注 (16) と (17) は逆に番号が振られている。]
- 3) 岡田文弘氏の教示による。他にも八幡信仰に関連して「過去の薬王菩薩は自身の為に身を焼く行を立て、今の人間菩薩 (= 仏道修行する八幡神) は、衆生の為に身を焼く行を立つるなり」(重松 1986, 126, 137) という記述があり興味深い。[但し、『託宣』が薬王菩薩が前世、身を焼いたのを「自身のため」としているのは正しくない。Cf. 本論 3 「必須モチーフ」]。
- 4) 干潟 1970, 618-623; 杉本 1993, 213-225 は、干潟論文を遙かに凌ぐ情報量である。最近の薬王品研究としては、Suzuki 2014 がある。
- 5) 復次菩薩常敬重於仏。如人敬重父母。諸菩薩蒙仏説法。得種種三昧種種陀羅尼種種神力。知恩故広供養。如法華經中藥王菩薩。從仏得一切變現色身三昧。作是思惟我当云何供養仏及法華三昧。即時飛到天上。以三昧力雨七宝華香幡蓋供養於仏。出三昧已意猶不足。於千二百歳。服食衆香飲諸香油。然後以天白疊纏身而焼。自作誓言。使我身光明照八十恒河沙等仏世界。是八十恒河沙等世界中。諸仏讚言。善哉善哉善男子。以身供養是為第一勝。以国財妻子供養百千万倍。不可以譬喩為比。於千二百歳身然不滅。
- 6) 又如衆生喜見菩薩。以身為燈供養日月光徳仏。如是等種種不惜身命供養諸仏。
- 7) 又言本作。一切衆生所喜見王童子之身。我十二年食香焼身供養仏法。心不生悔。
- 8) 作一燈炬如須弥山。供奉如来。照恒河沙諸仏国土。以貢上仏。以細帛氎裹覆其身。灌用麻油以為燈火。自然已身演其光明。照遍三千大千仏土。
- 9) jinadhātustūpapurato me 'valita āśrayaḥ paramabhaktyā |  
pūjā kṛtā daśabalānām āsi nṛpātmajo Vimalatejāḥ ||
- 10) rgyal bu gzi brjid dri ma med gyur tshe //  
ña yis rgyal baḥi riñ bsrel mchod rten mdun//  
mchog tu gus pas lus la me btañ ste//  
stobs bcu mñañ ba rñams la mchod pa byas //
- 11) 亦作王子名淨威 於仏塔前自然身 恭敬供養於十力 無上最勝兩足尊
- 12) 於仏塔前燃已身 志心恭敬作供養 又昔曾為無垢王

〈参考文献〉

- 岡田真美子 1990 「Dvāviṃśatyavadānakathā 中の未比定説話」『印度学仏教学研究』39 (1): 455-458.
- 重松明久 1986 『八幡宇佐宮御託宣集』「日本国御遊化の部 焼身峯の事」現代思潮社。
- 杉本卓洲 1993 「法華經にみえる本生談と菩薩の捨身」『菩薩——ジャータカからの探求——』サーラ叢書 29. 平楽寺書店。

## (212) 《一切衆生喜見菩薩説話》の平行研究 (岡 田)

- 干潟龍祥 1970「本生経類と法華経の関係」金倉圓照編『法華経の成立と展開』平楽寺書店。
- 船山徹 2002「捨身の思想——六朝仏教史の一断面——」『東方学報』(京都) 74: 311-358  
([41]-[88]) .
- 三友量順 1996「薬王菩薩と「燃身」」『勝呂信静博士古稀記念論文集』山喜房仏書林, 391-406.
- 望月海慧 2009「焼身供養は正しい仏教的行為なのか」『日蓮仏教研究』3: 29-48.
- Feer, M. Léon, trans. 1891. *Avadāna-çataka, cent légendes (bouddhiques)*. Paris: E. Leroux.
- Mitra, Rājendralāla. 1882. *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*. Calcutta: Sanskrit Pustak Bhandar, Repr. 1971.
- Winternitz, Moriz. 1919. *A History of Indian Literature*. Vol. 2, *Buddhist Literature and Jaina Literature*. Motilal Banarsidass (Revised edition 1972). Translated into English by Sylvain Lévi, Huber. (原著ドイツ語 1909)
- Okada, Mamiko. 1985. “Dvāviṃśatyavadānakathā.” Inauguraldissertation zur Erlangung der Doktorwürde vorgelegt der philosophischen Fakultät der Rheinischen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn.
- . 1993. *Dvāviṃśatyavadānakathā, ein mittelalterlicher buddhistischer Text zur Spendenfrömmigkeit: Nach zweiundzwanzig nepalesischen Handschriften*. Bonn: Indica et Tibetica Verlag.
- Suzuki Takayasu. 2014. “The Compilers of the *Bhaiṣajyarājapūrvayoga-parivarta* Who Did Not Know the Rigid Distinction between *Stūpa* and *Caitya* in the *Saddharmapuṇḍarīka*.” 『印度学仏教学研究』 62 (3): 1185-1193.

〈キーワード〉 後期アヴァダーナ, 法華経薬王品, 一切衆生喜見菩薩, 燃身, 燈明供養, 仏塔供養

(兵庫県立大学名誉教授, Dr.Phil.)